

門の文とてふみをもてきたり、みなねたるに火ちかくとりよせて見れば、あすみどきやうのけちぐはんにて、宰相中將の御物いみにこもり給へるに、いもうとのあり所申せとせめらるゝに、すぢなし、さらにえかくし申まじき、そことやきかせ奉るべき、いかに仰せに、去たがはんとぞいひたる、返事もか、で、めを一寸ばかりかみにつゝ、みてやりつゝ、さて後にきて、一夜せめてとはれて、すゝろなる所にあてありき奉りて、まめやかにさいなむにいとからし、さてとかくも御かへりのなくて、そゝろなるめのはしをつゝ、みて給へりしかば、とりたがへたるにやといふに、あやしのたがへ物や、人のもとにさる物つゝ、みてをくる人やはある、いさゝかもこゝろえざりけると、みるがにくければ、物もいはで、すゝりのあるかみのはしに、

かづきするあまのすみかはそこなりとゆめいふなとやめをくはせけん、とかきていだしたれば、歌よませ給ひつるが、さらに見侍らじとて、あふぎかへしてにげていぬ、

〔清良記 七上〕糞草之事

一 海藻類 略 ○ 中

是等は草木の内にも多して、勝れたる養也、此外不可勝計、